

問 次の文中の傍線部①～⑳の用言について、それぞれを文法的に説明しなさい。

文法的説明の仕方について

用言の場合、活用の種類、品詞名、終止形（原形）、活用形の順に説明します。

たとえば、

「雨降れば」の「降れ」は、ラ行四段活用の動詞「降る」の已然形、

「心美しからば」の「美しから」は、シク活用の形容詞「美し」の未然形、

「あはれなれば」の「あはれなれ」は、ナリ活用の形容動詞「あはれなり」の已然形、

のように説明します。

八月十五日ばかりの月に出で①あて、かぐや姫、いと②いたく③泣きたまふ。人目も、今はつつみたまはず泣きたまふ。これを④見て、親どもも、「何事ぞ。」と⑤問ひ騒ぐ。かぐや姫、泣く泣く言ふ、「さきさきも⑥申さむと思ひしかども、かならず心惑はしたまはむものぞと思ひて、今まで過ごし⑦はべりつるなり。さのみやはとて、うち⑧出ではべりぬるぞ。おのが身は、この国の人にも⑨あらず。月の都の人なり。それをなむ、昔の契り⑩ありけるによりてなむ、この世界には⑪まうで来たりける。今は、⑫帰るべきになりければ、この月の十五日に、かの元の国より、迎へに人々⑬まうで来むず。さらすまかりぬべければ、思し嘆かむが⑭悲しきことを、この春より、思ひ嘆きはべるなり。」と言ひて、⑮いみじく泣くを、翁、「こは、なでふことをたまふぞ。竹の中より⑯見つけきこえたりしかど、菜種の大きさ⑰おはせしを、わが丈立ち並ぶまで養ひたてまつりたるわが子を、何人か⑱迎へきこえむ。まさに許さむや。」と言ひて、「われこそ⑲死なめ。」とて泣きののしること、いと⑳堪へがたげなり。

かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。かた時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国にはあまたの年を⑲経ぬるになむありける。かの国の父母のことも⑲おぼえず。ここには、かく⑲久しく遊びきこえて、慣らひたてまつれり。⑲いみじからむ心地も⑲せず。⑲悲しくのみある。されど、おのが心ならずまかりなむとする。」と言ひて、もろともに⑲いみじう泣

く。<sup>⑳</sup> 使はるる人も、年ごろ慣らひて、立ち別れなむことを、心ばへなど<sup>㉑</sup> あてやかに<sup>㉒</sup> うつくしかりつることを慣らひて、<sup>㉓</sup>  
恋しからむことの<sup>㉔</sup> 堪へがたく、湯水<sup>㉕</sup> 飲まれず、<sup>㉖</sup> 同じ心に<sup>㉗</sup> 嘆かしがりけり。<sup>㉘</sup>

解答例

- ① ワ行上一段活用の動詞「みる」の連用形。(助詞「て」に接続する時は必ず連用形)
- ② ク活用の形容詞「いたし」の連用形。「泣く」という動詞に接続するので連用形)
- ③ カ行四段活用の動詞「泣く」の連用形。「たまふ」という補助動詞に接続するので連用形)
- ④ マ行上一段活用の動詞「見る」の連用形。
- ⑤ ハ行四段活用の動詞「問ふ」の連用形。
- ⑥ サ行四段活用の動詞「申す」の未然形。(意志の助動詞「む」に接続するので未然形)
- ⑦ ラ行変格活用の(補助)動詞「はべり」の連用形。(完了の助動詞「つ」に接続するので連用形。なお、「つ」は断定の助動詞「なり」に接続するので連体形「つる」と活用している。)
- ⑧ ダ行下二段活用の動詞「出づ」の連用形。
- ⑨ ラ行変格活用の動詞「あり」の未然形。(打ち消しの助動詞「ず」に接続するので未然形)
- ⑩ ラ行変格活用の動詞「あり」の連用形。(過去の助動詞「けり」に接続するので連用形)
- ⑪ カ行変格活用の動詞「まうで来」の連用形。(存続の助動詞「たり」に接続するので連用形。「まうで来」は「まうづ」と「来」の合体した複合動詞。「来」の読みに注意。連用形は「き」。)
- ⑫ ラ行四段活用の動詞「帰る」の終止形。(当然・義務の助動詞「べし」に接続するので終止形。四段活用は終止形と連体形が形が同じなので、注意。このような場合には、接続する語(後に来る語)が前に来る語の活用形を決めていることから判別します。)
- ⑬ カ行変格活用の動詞「まうで来」の未然形。(推量の助動詞「むず」に接続するので未然形。「来」の読みは「こ」)
- ⑭ シク活用の形容詞「悲し」の連体形。(名詞「こと」に接続するので連体形)
- ⑮ シク活用の形容詞「いみじ」の連用形。(濁っても「ジク活用」とは言わない。)
- ⑯ カ行下二段活用の動詞「見つく」の連用形。「見る」＋「付く」の複合動詞。)

- ⑰ サ行変格活用の動詞「おはす」の連用形。(過去の助動詞「き」に接続するので連用形。「き」は省略された「こと」に接続するので連体形「し」と活用している。)
- ⑱ ハ行下二段活用の動詞「迎ふ」の連用形。(補助動詞「きこゆ」に接続するので連用形)
- ⑲ ナ行下二段活用の動詞「死ぬ」の未然形。(意志の助動詞「む」に接続するので未然形。「む」は係助詞「こそ」の結びなので已然形の「め」に活用しています。)
- ⑳ ナリ活用の形容動詞「堪へがたげなり」の終止形。(動詞「堪ふ」＋形容詞「かたし(難し)」で「堪へがたし」。形容詞「堪へがたし」＋「げなり」で形容動詞になります。)
- ㉑ ハ行下二段活用の動詞「経(ふ)」の連用形。(完了の助動詞「ぬ」の連体形「ぬる」に接続するので連用形。「得(う)・寝(ぬ)・経(ふ)」は語感と語尾の区別のない下二段活用の語、と覚えておいてください。)
- ㉒ ヤ行下二段活用の動詞「おぼゆ」の未然形。(ヤ行であることに注意。)
- ㉓ シク活用の形容詞「久し」の連用形。
- ㉔ シク活用の形容詞「いみじ」の未然形。(推量の助動詞「む」に接続するので未然形)
- ㉕ サ行変格活用の動詞「す」の未然形。
- ㉖ シク活用の形容詞「悲し」の連用形。(「のみ」を飛ばして、動詞「あり」に接続するので連用形)
- ㉗ シク活用の形容詞「いみじ」の連用形「いみじく」のウ音便。(音便が起こっている場合はその説明も。)
- ㉘ ハ行四段活用の動詞「使ふ」の未然形。(受身の助動詞「る」に接続するので未然形。「る」は「人」に接続するので連体形の「るる」になっている。)
- ㉙ ナリ活用の形容動詞「あてやかなり」の連用形。(形容詞「うつくし」に接続するので連用形)
- ㉚ シク活用の形容詞「うつくし」の連用形。(完了の助動詞「つ」に接続するので連用形)
- ㉛ シク活用の形容詞「恋し」の未然形。
- ㉜ ク活用の形容詞「堪へがたし」の連用形。(読点「、」に続くので連用形。連用中止法。)

③③ マ行四段活用の動詞「飲む」の未然形。(可能の助動詞「る」に接続するので未然形。「る」は「ず」に接続するので未然形「れ」に活用している。)

③④ シク活用の形容詞「同じ」の連体形。(「同じ」の連体形は活用表に従えば「同じき」だが、「同じ」という連体形も普通に使われた。文法のテキスト三七ページ下段参照。)

③⑤ ラ行四段活用の動詞「嘆かしかる」の連用形。(過去の助動詞「けり」に接続するので連用形。「形容詞」＋「くがる」で動詞になる。例「寒し」＋「がる」|| 「寒がる」。)

答え合わせをして、気づいたことはありませんか。

形を見ただけでは、活用形がわからないことがありますね。四段活用は連体形と終止形が同じ形、ラ変は連用形と終止形が同じ「り」、上一、上二、下一、下二は未然形と連用形が同じ形です。このとき、次に述べる(前にも述べた?)「接続」が決め手になります。

**ポイント 「日本語は足し算する時に形が変わる(活用する)」**

私たちは普段会話するときに、全く文法を意識していませんが、文法に則って会話しています。文法を誤れば、変なことを言っ  
た思われますし、自分で気づくこともあるでしょう。

日本語は「膠着語(こうちやくご)」だと、前に書きましたが、「膠着語」の特徴は「言葉と言葉が接続するとき語形変化する」という点にあります。

たとえば、文中に「立ち別れなむこと」とありますが、これを品詞分解すると、  
動詞「立ち別る」＋助動詞「ぬ」＋助動詞「む」＋名詞「こと」となります。

「立ち別る」は強意の助動詞「ぬ」に接続するので、「立ち別れ」と連用形になり、

「ぬ」は推量の助動詞「む」に接続するので、「な」と未然形になり、

「む」は名詞に接続するので連体形になります。

要は、下に来る語との関係で、活用語は語形変化することです。

言い換えれば、下に来る語が上に来る語の活用形を決定しているということです。

たとえば、接続助詞「て」や「用言」が後に来れば連用形になり、名詞が続けば連体形になります。

ポイントは助動詞が前に来る語の活用形を指定しているということです。「ず」や「む」の前は未然形、「き」や「けり」の前は連用形、「べし」や「らむ」の前は終止形（ただし、ラ変型活用語は連体形）、断定の助動詞「なり」や「ごとし」の前は連体形、（存続の助動詞「り」の前は已然形（命令形）というように、接続が決まっています。文法のテキストのオモテ表紙ウラの助動詞の活用表をみてください。この表の一番上は「接続」となっています。接続によって助動詞が分類されています。これを見れば、その助動詞が何形接続なのか（その助動詞が前に来る語を何形にするか）がわかります。

また、助動詞自体が、後に続く語によって活用していることにも注意してください。

以上が、日本語の文法の「キモ」の部分です。腑に落ちるまで、よく理解してください。

いっぺんに理解できなくても、それはあたりまえ。いまは、「どんなことばが、いつ、なぜ形を変えるか」という基本の法則を理解しておいてもらえれば、それで十分です。細かいことは、これから慣れていけば、自然に覚えてしまいます。助動詞は2学期に整理します。

### おまけのポイント 「なむ」の識別

「年を経ぬるになむありける。」(二九・二)と「まかりなむとする。」(二九・五)の二つの「なむ」は全く違った言葉です。

「年を経ぬるになむありける。」の「なむ」は係助詞の「なむ」ですね。結びの「けり」が連体形の「ける」になっていることから確認できます。

「まかりなむとする。」の「なむ」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」+意志の助動詞「む」の終止形です。

他にも「雨降らなむ」という時の「なむ」があります。「雨が降って欲しい」という意味です。

これらを識別するポイントは、「接続」です。

名詞（名詞グループ）に接続していれば、係り助詞。

活用語の連用形に接続していれば、「ぬ」＋「む」。

活用語の未然形に接続していれば、他に對する願望（あつらえ）の終助詞。

以上のように識別します。（文法のテキスト一五二ページ参照。）

「なん」の識別はしよっちゅう試験にでますので、受験生の常識です。覚えてね。